[活動報告]

ブルネル・スピリット研究会企画　No.12-152 特別講演会

ブルネルとシェイクスピアの「驚きの島々」

― ロンドンオリンピックの開会式での演出を読み解く―

ブルネル・スピリット研究会主査
佐藤建吉（千葉大学）

序

私事を交えて書くことに少し躊躇するが、実感を表現するためにお許し願いたい。

2012年7月末、私は、高知市で開催された地域活性学会に出席のため、ホテルに宿泊していた。その夜、携帯電話が鳴った。「ロンドンオリンピックの開会式に、ブルネルが出ているよ・・。」埼玉の所沢に住む、姉からであった。私もTVを見ていたので、様子はわかっていたが、「何人もの黒いスーツとシルクハットの男たちがたくさんいるけど・・。」しばらく電話で話したが、その後もTVを見続けた。

TVに、次から次に現れる映像は、歓喜に満ち、しかも重々しく、さらに女王をもエンターテイメントに登場させた展開が、何かしらストーリーのある演出であると感じた。

上のくだりは、2012年7月28日の深夜に放送されたロンドンオリンピックの開会式の様子を伝える映像シーンに関するものでした。その開会式には、私が長らく注目してきたエンジニア、イザムバード・キングダム・ブルネルのほか、同じく『BBCの偉大な英国人』であるシェイクスピアの作品も登場した。私の姉ばかりでなく、日本の多くの人が、この開会式のことを理解できる人は少ないのでは？と、頭をよぎったのでした・・。

学会から帰って研究室に戻ると、篠崎実先生を思い出した。千葉大学でシェイクスピアを研究している英文学者である。その前の年、彼から初めてのメールをもらった。「いまイギリスにいます。研究のためオックスフォードに来ています。ブルネルのことで、検索したら千葉大の佐藤さんが出てきたのですが、出身が鶴岡市だそうですが、私もそうで、嬉しくなってメールしました・・。」そのような内容であった。私も返信し、その後、同じ大学なので、一杯やろうということになっていたが、会わずじまいでした・・。

そこで、篠崎先生にメールして、ロンドンオリンピックの開会式のことで相談したいことがあるが、と伝えるとすぐに研究室に来てくれるとのことであった。

こうして、『ロンドンオリンピックの開会式での演出を読み解く』という行事を開催するプロジェクトが立ち上がった。「どこで、いつ、どのようにやるか、・・」。その下案を、早速つくり、篠崎先生と再度相談した。そんな折、イギリスのブルネル大学から親しいストラスキー（Tadeusz Stolarski）氏が、来日するというメールが来たのでした。こうして、行事の後援をお願いしていた在京イギリス大使館の一等書記官、ケビン・ナペット（Kevin Knappett）氏も加えて二人のイギリス人ゲストを迎えて開催することになった。

また、オリンピックの関わりであるので、2020年の東京オリンピックにも関係付けたいと考え、会場は東京で開催することにこだわり、日比谷公園内の図書文化館のホールで行うことにした。そのため、都庁の東京オリンピック招致委員会にも相談し、この行事の閉会の挨拶はその委員長にお願いしたいと依頼したが、予定が合わないということで、それは未定のままであったが、日英協会の後援と千葉大学の後援を願い、この行事の主催は日本機械学会、その企画は技術と社会部門の特別講演会ということで開催することが出来るようになった。

開催も間近になり、新宿区の根本二郎議員にご相談し、モントリウォールオリンピックでの柔道の銅メダリストで、ライオンズクラブの東京オリンピック・パラリンピック招致支援委員会副委員長をされている工藤章氏に閉会のご挨拶をお願いすることができるようになり当日、2012年10月26日（金）を迎えた。

当日の総合司会は研究室出身者でフリーアナウンサーの多和田弓子に、英語通訳は近親者の戸田裕美子（日大講師）にお願いし、また会場受付も、研究室の卒業生・学生にお願いいして、いよいよ開場した。

破

開会は、予定より若干遅くなりましたが、それまでロンドンオリンピックの開会式の様子をBBC放送のビデオを観ていただいた。その映像は、いまでも次のサイトでご覧いただける。

http://www.youtube.com/watch?v=4AsOe4de-rI

いよいよ準備が整い司会者が開会を伝えた（図１）。まず主催者の筆者が、はじめにご挨拶を申し上げた。

２番目に、英国大使館の一等書記官、科学技術部長のナペット氏から、「オープニングスピーチ」として、この会を開催されることに関しての謝意と、英国と日本との技術交流の関係についてお話を頂いた。

その中で、同氏は、ブルネルは技術の発展に対して、未来への技術革新を引き起こした人物であり、日本とイギリスは明治以降に深い関係があるので、今日のいろいろのリスクや問題を解決するためには、日本と英国が協力し、そうした課題に取り組むことが重要である、と述べられた（図２）。

図１　司会者の多和田弓子

図２　ナペット氏と戸田裕美子

さて、この開会式の式典は、この行事の題名、および本稿の表題にあるように、「驚きの島々」という言葉が冠せられている。この言葉は、シェイクスピアの戯曲“Tempest”（邦訳『あらし』）に由来する。

３番目に、この行事では、既述のシェイクスピア演劇研究家、篠崎実教授にその謎を解いていただいた。

篠崎氏は、この式典はイギリスの代表的な舞台・映画監督のダニー・ボイル（Danny Boyle）氏の演出によるが、その演出のわかりにくい理由には、

①シルクハットの人物が何者なのか？

②シェイクスピアの作品『あらし』の文脈が、どう関わっているのか？

③イギリス国歌に相当する歌「エルサレム」の意味が、字幕で明らかにされていないことの三つあるだろうと述べた。

そして、この開会式の式典は、ダニー・ボイル氏自身の出自にも関係し、この演出が組立てられているという。

篠崎氏は、この式典はイギリス国歌と言われる「エルサレム」（Jerusalem）の中に全てが関係しているとし、講演ではその件（くだり）を以下のように説明された（図３）。

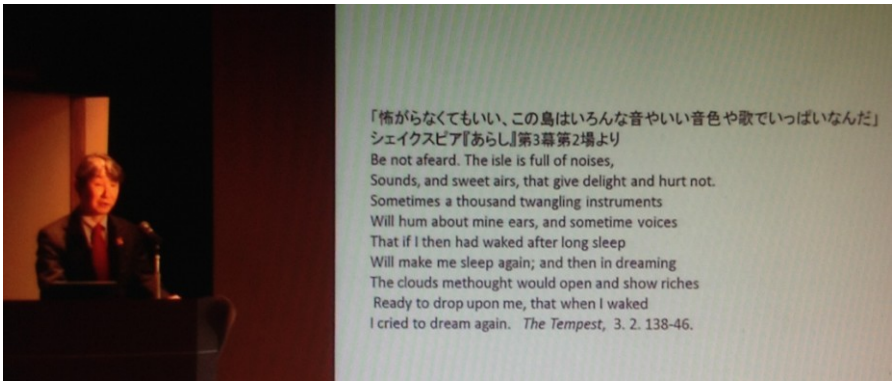

図３　シェイクスピアとの関わりについて述べる篠原実氏

その歌詞は以下の通りで、下線を施したところがそのポイントで、「イングランドの心地よい牧草地」、「悪魔の工場」、「炎の戦車」の三つがキーワードとなる。

イングランド国歌「エルサレム」の歌詞

And did those feet in ancient time,	古代　あの足がイングランドの山の草地を歩いたというのか
Walk upon Englands mountains green:	
And was the holy Lamb of God,	神の聖なる子羊がイングランドの心地よい牧草地にいたなどと
On Englands pleasant pastures seen!	
And did the Countenance Divine,	神々しい顔が雲に覆われた丘の上で輝き
Shine forth upon our clouded hills?	ここに　エルサレムが　建っていたというのか
And was Jerusalem builded here,	
Among these dark Satanic Mills?	こんな闇の悪魔の工場のあいだに

Bring me my Bow of burning gold:	燃える黄金の弓を
Bring me my Arrows of desire:	願いの矢を、槍を　ぼくに与えてくれ、
Bring me my Spear: O clouds unfold!	ああ　雲よ　晴れろ
Bring me my Chariot of fire!	炎の戦車を　ぼくに与えてくれ
I will not cease from Mental Fight,	精神の闘いから　ぼくは一歩も引かない
Nor shall my Sword sleep in my hand,	この剣を手のなかで眠らせてもおかない
Till we have built Jerusalem,	ぼくらがエルサレムを打ち建てるまで
In Englands green and pleasant Land.	イングランドの心地よいみどりの大地に

その大意は、次のようである。

“若いイエスが、まだ「牧草地が生い茂る」イングランドの地を訪ね、その地に最初の教会をつくった。それが開会式のスタジアムに造られた丘（グラストンベリー）の丘の教会であり、「あの足」は「キリストの足」である。かつてキリストの時代には「イングランドの緑豊かな草地」を歩けたというのに、いまではこの国は、「悪魔の工場」が立ち並ぶ、見る影もない姿になってしまった。だがそれでも、ぼくは神に与えられた「炎の戦車」に乗って、金の矢をとって、イングランドにエルサレムを建てるまで「精神の戦い」をやめない。”

開会式を組み立てるキーワードがここにすべて出ている。「エルサレム」は、18世紀イギリスの詩人ウィリアム・ブレイクの預言詩『ミルトン』(Milton) の序詩に、作曲家サー・チャールズ・H・パリーが1916年に曲をつけた合唱曲である。「エルサレム」は、イギリスで毎年、夏に行われる恒例音楽祭“プロムス”の最終夜に必ず合唱される、イギリス人の愛唱歌でもあるという。

ダニー・ボイルは、この式典を「エルサレム」に重ね、イギリスの歴史を理想社会を求める歴史として示している。その演出には、産業革命の象徴的な人物としてブルネルが最適であると考えたのである。それは、ブルネルがフランスからの移民の子であるという出自が、大きな意味をもっている。

式典ではブルネルが登場した後、煙突がニョキニョキと現れ林立し煙が立ち込めパンデモンニューム＝伏魔殿・地獄と化す。牧歌的な緑の世界がレンガ色に、立ち込める煙が地獄の様子を示し、産業革命に始まる近代の歴史を、イギリス人がその負の側面を乗り越えて、理想の世界を勝ち得るものとして描いている。

18世紀にはじまる産業革命は、農村共同体の破壊、都市の膨張、環境汚染、という問題を起した。また産業革命によって獲得した資本主義社会の成長によって欧米列強は、市場と原料供給場を求め帝国主義的植民地政策を行った。その結果のカタストロフィーが、前世紀の２度にわたる世界大戦である。

これを、ボイルのスペクタルは、産業革命の地獄、戦死者の鎮言などの形で表現した。近代史の負の側面の克服の枠組となるのが、ブルネルを演じたケネス・ブラナーによる『あらし』からのキャリバンの台詞「怖がらなくともいい、この島はいろんな音やいい音色や歌でいっぱいなんだ」の朗読でした。

『あらし』は、1612年にシェイクスピアの最後の作品で、魔術の力が劇中世界を操る主人公プロスペローが、シェイクピアと長らく重ね合わされてきた。帝国主義の融和という側面が強調されるようになって、キャリバンという怪物的な登場人物がクローズアップされるようになってきた。

魔術に没頭するうちに、国を弟に奪われてしまい、命からがら娘とともに逃げ、船でたどり着いたのが島で、その島には、キャリバンという野蛮人が住んでいた。プロスペローはキャリバンから島を奪い、彼を奴隷にし、母親シコラプスの魔法によって木の根の中に閉じ込められていた空気の精霊エアレエルを従え島で暮らす。この島の近くを船で通る弟との和解を中心としてこの物語ははじまる。それは、イギリスによるバージニアへの上陸という事実と重ねている。

ヨーロッパからやってきて島の主となったプロスペローと、島の原住民キャリバンの関係にヨーロッパ人による植民地形成の夢を読み込んでいる。野蛮なはずのキャリバンが発する劇中、最も知的な一節として注目される。

支配者プロスペローの魔術により、島中に「不思議な音」が響きわたっていることから、キャリバンがそれを、美しい無害なものだとしていることは、支配と隷属についてのメタファーとして、皮肉な意味を持つものと言える。

開会式の演出家ボイルは、近代史の負の側面の克服という枠組みに合うように、このセリフの意味付にあるように思う。その鍵となるのは、も一方の登場人物イザムバード・キングダム・ブルネルの素性です。

「キングダム」は母の姓で王国を意味し、「ブルネル」はフランス人の父の姓で、フランスからの移民の子であり、ブルネルが、

「怖がらなくともいい、この島はいろんな音やいい音色や歌でいっぱいなんだ」

と『あらし』の一節を朗読することには、植民地の住民と移民が交じり合う声が、怖がることはない、それは歴史の負の側面を乗り越えて理想の国家をつくろうとする担い手たちの声であることを、高らかに宣言していることを意味している。

そして、続々と移民たちが登場し、歴史の負の側面を示した後、五輪の一つを鋳造し、技術の進歩、社会改革、NHS（ナショナル・ヘルス・サービス）による社会保障制度の充実を示し、イギリスが、この島のあらゆる人々の力で理想の社会を実現することを歌い上げているのである。その象徴として、家族という一番小さな単位における幸福の実現を、式典会場内に建てられた一軒家の家庭の団欒の様子を示す趣向となっていました。その家族の構成は、白人の母親と黒人の父親その子供たちでした。

理想の達成のために、象徴的に挙げられているのは、「炎の戦車」という言葉であるが、イギリスとオリンピックの関係において、「炎の戦車」という言葉は特別の意味がある。

「炎の戦車」（Chariots of Fire）は、1924年のパリオリンピックに参加して優勝した2人の活躍と苦悩を描いた1981年の映画で、邦訳は『炎のランナー』である。

オリンピックは、５つの大陸が結びつく平和の祭典であるとととともに、理想の王国を実現するための人々の戦いを象徴するものとなっている。式典では、選手入場が終わると、グラストンベリーの丘には各国の国旗が立ち並び、そこで女王がオリンピックの開会を宣言する。

それが意味することは、キリストがかつて足を踏み入れたこの丘に、世界の人々が足を踏み入れ、そこにオリンピックという新しい王国が建設された、ということでした。

４番目に、佐藤建吉が、ブルネルが53年の短い生涯で成し遂げた事績について詳しく紹介した。その前段では、オリンピック開会式での登場シーンなどなどについても語った。日本では、ブルネルよりもスチーブンソンの方が知られているが、その背景についても述べた。

後段ではブルネルの日本における名前は、鉄道におけるブルネル賞が有名であり、私たちの日常で、車両、駅舎、LED行き先表示器、さらには「駅からマップ」などの大きなものから小さなものまで、「ブルネル賞」の範囲は広い。共通するのは、革新的な取り組みをなしたデザインに対して顕彰するため授与されている。その他、ブルネルに関連した紹介がなされた。

５番目に、ブルネル大学の名誉教授のストラスキー氏が、ブルネル父子、ブルネル大学、さらにその現況について説明してくれた。ブルネル大学は、韓国やカナダのチームの練習会場・選手村として使われたと述べた。

続いて、トークセッションが図４の写真のように、佐藤建吉、篠崎実、タデアス・ストラスキー（通訳、戸田裕美子）の4名が登壇して行われた。会場からの質問が2つあり、楽しいやりとりが行われた。

図４　トークセッションの一シーン

最後に、モントリオールオリンピックのレスリングで銅メダルを受賞された工藤章氏にお願いした。オリンピック招致の意気込みを語られた。そして、東京に2020年にオリンピックを呼び込むために、一本締めが行われた（図５）。

これで閉会の予定であったが、この後、講談師・宝井駿之介が登壇し、師匠の田辺一鶴のデビュー作である「東京オリンピック入場行進」を、参加93カ国の国名を登場順に読み上げる名調子を、会場内を参加者と握手しながら行って、会場を盛り上げてくれた（図６）。その様子に、ナッペット氏もストラスキー氏も日本の文化の一端を体験し喜んでくれた。

なお、田辺一鶴師匠は、NHKの『日本の話芸』で、『ブルネル物語』を、生前の2009年にTV放送している。

こうして、歓喜と感銘のうちに、この行事を終えることができた。

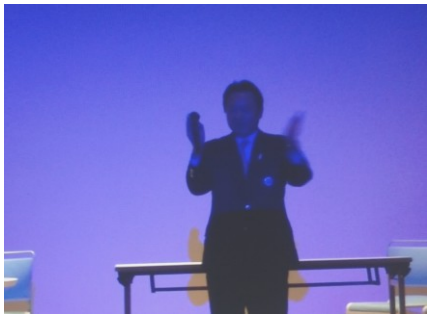

図５　工藤章氏による一本締め

図６　宝井駿之介の講談

急

以上のように、特別講演会は終了することができたが、さらに追加の話題を記しておきたい。ロンドンオリンピックの開会式の模様は、TVやインタネットで知るだけであったので、その臨場感を正しく伝えるためには、現地の様子を把握する必要があると考え、行事の前にロンドンに出かけることにした。

10月11日に、成田を出発し、ロンドンに着いた翌日は、オリンピックスタジアムに向かった。ストラドフォード駅に隣接している。オリンピックを行うためにロンドンの交通システムにもスイカのようなOyster Cardによる自動改札が導入され、大変便利であった。

スタジアム周辺の施設は、解体し集合集宅につくり替えるそうで、その整備工事が盛んに行われていた（図７）。

図７　オリンピックスタジアムと整備工事中の周辺の様子（2012年10月12日）

また、式典で、スタジアムに造られたグラストンベリー・トー（イングランド西部のサマセットの聖地）に結集した黒い衣装の男・40人（上に立つのがブルネルに扮した俳優・ケネス・ブラナー（Kenneth Branagh））の中には、日本人の長田武氏がいた（図８、９）。

図８　スタジアムに造られた丘―グラストンベリー・トーとブルネル軍団
（http://www.youtube.com/watch?v=4AsOe4de-rlから引用）

図９　蒸気機関の前で躍起のパフォーマンスを演じるブルネル軍団
（手前の点線で囲まれている男性は、軍団の一人で日本人の長田武さん）
（http://www.youtube.com/watch?v=4AsOe4de-rlから引用）

そこで、ロンドンで氏に会い、開会式の役割やリハーサルの様子などをインタビューした。

また、NHS（ナショナル・ヘルス・サービス）のほか、シェイクスピア劇場のグローブ座やテムズ河の博物館と大学、さらにグラストンベリー・トーに登頂し、旧聖ミカエル教会からのサマーセットのパノラマを経験した。

さらに、オリンピックとは関係ないが、ブルネルが別荘として設計・建造したTorquay（トーキー）にあるBrunel Manorを訪ねた。ブルネルは、この別荘には訪れたことがなかったが、彼の思いを感じることが出来た。

以上のように、ロンドンオリンピックの開会式の式典（イベント）に、ブルネルが登場する演出には、イギリス人の誰もが疑義を唱えることは起こらない人選であった。その演出の深意は、ここで読み解いたように、イギリスが辿ってきた歴史を、文芸と技術の側面から、エンターテイメントとして表現し、なお混乱に満ちた現代を如何に克服し、未来をつくりあげなければならないかを示すことにあったと言える。

解決すべき課題は、英語では、“challenge”としばしば言われるが、この言葉は、大使館のナペット氏もブルネル大学のストラスキー氏も語っており、それはブルネルが心にいつも抱いていた言葉でもあり、同時にブルネルは“great”という言葉も多用し大切にした。

いま、私たちも、“challenge”と“great”を大切にすべきであることは、この特別講演会が伝えたことでもあった。私は2020年の東京オリンピック・パラリンピックが招致されることを願うもののひとりであるが、それが開催される場合には、2012年のロンドンオリンピックの開会式で演出されたように、自国の歴史が作り上げてきた理想の社会構築ために“challenge”と叫び努力し、歓喜と賞賛が得られるような式典に仕上げて頂きたいと願う。

最後に、この行事を開催するにあたって、ご協力いただいた登壇して頂いた発表者（Kevin Knappett・篠崎実・Tadeusz Stolarski・工藤章・宝井駿之介の各氏）、通訳者、司会者、受付担当者、さらに技術と社会の部門長・星朗氏と事務局・曽根原雅代氏にお礼申し上げる。また後援して頂いた千葉大学・日英協会・英国大使館に感謝申し上げる。

以上

(C)著作権:2013　一般社団法人日本機械学会 技術と社会部門